

# 令和5年度特色入試問題

## 《文学部》 論文試験

A～Cの3段階評価

### (注意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに8ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに4ページあり、そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお、別に下書き用紙4枚を配布する。
4. 試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。  
表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子はどのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。





問 次の二つの文章を読み、以下の問い合わせに答えなさい。なお、解答の中では、問題文 A（英語）の筆者を A、問題文 B（日本語）の筆者を B と表記すること。

- (1) 問題文 A の筆者の主な考えをまとめなさい。(400 字以内)
- (2) 問題文 B の筆者の主な考えをまとめなさい。(400 字以内)
- (3) 二つの文章をふまえて、信仰と国家の関係について、あなたの考えを述べなさい。(800 字以内)

問題文Aは出典のみ公開する。

Hans Joas, "Society, State and Religion: Their Relationship from the Perspective of the World Religions: An Introduction," in Hans Joas and Klaus Wiegandt, eds., translated by Alex Skinner, *Secularization and the World Religions*, Liverpool University Press, 2009, 2ページ10行目～5ページ20行目（一部改変）

<https://academic.oup.com/liverpool-scholarship-online/book/43526>

## 問題文 B

一九四五年の敗戦によって、日本はアメリカへの政治的軍事的従属のもとで「民主化」され、経済成長に国民的エネルギーを集中することとなった。絶対的な権力と権威としての虚焦点は解消され、国体論的ナショナリズムへの積極的な忠誠は失われた。現在の日本国憲法には「政教分離」と「信教の自由」が明確に規定されており、それは明治憲法のもとでのような限定つきのものではない。しかしいつそう長い歴史的展望からすれば、敗戦を境とする日本社会の転換は、一九世紀以来の資本主義的世界システムの内部への国民国家日本の再定位にほかならず、こうしたシステム内部から見るかぎり、戦後日本社会はひとつのみごとな成功譚だった。ここでは、その到達点を生活意識と社会意識の側面から測るために、NHK放送文化研究所編『現代日本人の意識構造 [第六版]』をおもな素材にして検討してみよう。

まず宗教については、「関心がない」七七%、「関心がある」「多少関心がある」をあわせて二三%で、宗教に積極的な関心をもっている人はあきらかに少数派である。初詣や墓参りは多数派の宗教的習俗だが、仏や神についての教義化された信仰をもつ人はきわめてわずかで、お守りや占いを信ずる人は若年層に多い。「神仏以外のものだけを信ずる人」が国民全体の四一%もいるという。

つぎに、生活全体について「満足」とする人が八六%もいて、この比率は七〇年代末からほとんど変わらない。「衣食住」「地域の環境」「人間関係」について、とりわけ満足度が高いのは、二五歳以下の若年層となっている。価値志向としては、「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」を求める人がはるかに多いのだが、そのことはまた家族結合への圧倒的な関心（九六%）と結びついているものと思われる。日本人は職場やその他の社会関係でも「情緒志向」が強いのだが、それはとりわけ家族という生活単位に集約される特徴である。他方、社会状況全般については、「混乱」「身勝手」「不公平」などとする人が多く、若者については「身勝手」「無気力」などとされる。政治不信は圧倒的に強い傾向で、むしろそれが社会通念となっているともいえよう。

こうした傾向をまとめて、身辺的、現在中心的、快楽志向、現状に満足する保守主義的心情としておこう。こうした傾向は戦後日本社会がゆっくりと育ててきたものだが、一九七〇年代以降に顕著になった。とりわけ、現在の若い世代にこうした傾向が強く見られることは、とくに留意すべきところである。

他方、政治不信と世相への批判的な気分にもかかわらず、「日本に生まれてよかつた」と思う人が九五%もいて、自分の生活レベルを「中流」だと思う人は九〇%を超えていく。象徴天皇制は圧倒的多数の日本人によって支持されており、天皇への「尊敬」は減少しているが、「好感」をもつ人は増えている。より一般

的にいって、日本についての自信は揺らいでいるが、しかしそれでもゆるやかなナショナリズム的心情が社会全体を覆っているといえる。

このような社会では、苦痛や残虐性や特殊な宗教的確信などは忌避される。ここでアサドの興味深い論点を参照すると、近代社会でも苦痛や残虐性は単純に排除されているわけではない。サド・マゾヒズムに表現されているように苦痛や残虐性も存在するのだが、しかしそれは個人の権利の範囲内でのことで、死や重大な傷害をもたらすような過剰さは阻止されなければならない。苦痛や残虐性が容認されているとはいえ、それはいわば正常性の再定義に動員されているということになろうか。そして苦痛や残虐性についてのこの規定からすれば、こうした規定の外にはみだすような苦痛や残虐性は、快楽の追及を自明視する社会からは、異様で狂信的なものだということになる。快楽の個人的な追及を自明視してしまうと、テロリズムを選ぶ人たちの意識は、つくられた虚偽意識か理解しがたい狂信ということになるわけだ。

このような状況のもとで宗教への切実な関心が希薄化するのは、不可避のことであろう。かつて民衆宗教は「貧病争」を扱うものだとされたが、いまや「貧」は生活水準の一般的な向上と消費社会化を背景にして、生活保護や年金制度などの国家的システムによって処理されるようになり、「病」は近代的医療制度がとりあつかう領域となった。「争」についても家庭内暴力などへの制度的介入が強められており、犯罪への予防的介入が強く求められるようになっている。長いあいだ死の問題と向き合ってきた仏教も、病気と死が近代的医療制度の対象となり、死体の処理や葬儀も葬儀屋などに担われるようになって、その社会的役割は大幅に縮減されてきている。死に向かうような重い病気にともなう苦痛が医学的に処理されてゆけば、死への恐れは軽減されて来世観も希薄化し、家産・家業の役割の衰退と家族の絆の弱体化によって、祖先祭祀への関心も薄れていく。こうした状況のなかで、宗教団体にも生き残りのための新たな活動分野・活動様式が求められるようになってきて、さまざまな模索が行なわれているが、しかしそれが期待されるほどの効果をあげているように見えない。

いま述べたことをもっとも端的に集約するのは、人間存在の根源的な否定性としての死の問題が、現代社会ではそれにふさわしい深さと重さとを失ってきているということだ、と云いなおしてみることもできよう。だが、日本宗教史を振りかえってみればあきらかに、人間存在そのものへの否定としての死への恐れや彼岸への憧れ、死体の処理や葬祭儀礼、病気とその苦痛から逃れるための祈禱などは、日本社会に仏教信仰が浸透したこととなった根本的な動因であった。近世的な祖靈崇拜と民衆宗教の現世主義的な教えは、死への恐怖を軽減させたけれども、しかしそれでもそうした信仰の基底部には適切に祀られない靈的存在への強い畏怖の感覚が存在しており、こうした存在がこの世界にさま

ざまな災厄や不幸をもたらすとされてきた。ところが、快楽の追求、苦痛の減少こそが人間の権利と自由であるということになり、そのための手段やシステムが複雑に発展すると、私たちはそうした次元のほうにとらわれて、死や苦痛をめぐる問題群と正面から向きあうことができなくなり、死という問題の側から生の意味を見つめなおす精神のキャパシティを失ってしまうこととなった。

だが、こうした状況こそが私たちを不安にし私たちの意識を断片化して、日本社会の全体を不安定にしているともいえる。とりわけ最近の政治的経済的な状況のもとでは、競争原理がこれまでよりもいつそうきびしく貫徹して階層分化が顕著となり、さまざまな抑鬱感情が蓄積されてきている。突発的で重大な犯罪、老人の孤独死、自殺、異様な宗教的小集団の活動などはこうした状況の顕著な表現であるが、より一般的には社会規範と生活規律の崩壊が憂慮されている。占いや守り札のような習俗的宗教性は衰えていないが、しかしそれは宗教的ディシプリンの崩壊と対応した現象であり、世俗的なものの即目的な肯定と結びついている。だが世界から大きな意味が失われ、生活規律の根拠づけが崩壊すると、そのこと自体が漠然とした不安の原因となり、方向の定まらない不安定な精神状況を生み出すこととなる。現在、社会生活のさまざまな領域で「心」の問題への関心が高まっているが、しかしそれはセラピーその他の精神衛生・精神医療の対象とされたり、学校教育や企業の人事管理の一環とされる傾向が強い。こうして「心」そのものが管理の対象となりシステム内部へととりこまれていくのだが、しかしそのようにして内部化された、一見おだやかそうな「心」に思いがけない亀裂や逸脱が生まれて、そのたびに専門家たちに対応策が求められる。だが、原理的な反省を欠いた対応策はかならず一時しのぎの弥縫策で、やがて破綻する。私たちが私たちの当面している問題に正面から向きあうことは、とても難しいのである。

(安丸良夫「現代日本における「宗教」と「暴力」」(磯前順一、タラル・アサド編『宗教を語りなおす 近代的カテゴリーの再考』みすず書房、2006年所収)より。一部改変)





c

c

g

f